
番外編 いざ、遊園地へ

nora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

番外編 いざ、遊園地へ

【Nコード】

N1115Z

【作者名】

nora

【あらすじ】

Get the Dream と Happenning Days の番外編です。

これを読む前に上記の2作品を読むことをオススメします。

GD:<http://ncode.syosetu.com/n1097z/>

HD:<http://ncode.syosetu.com/n1109z/>

- GDメンバ とHDメンバ は同じ遊園地に行くことになる。
午前中はそれぞれ思い思いにアトラクションを楽しむ彼らだが・・・

前編

今日は日曜日。

とはいえ、夏休み真っ只中の俺たち学生には全く関係ないのだが。

俺と咲は、リビングで何となくテレビを見ていた。

俺はテレビの前にあるソファに座り、咲はその後ろにあるテーブルの椅子に座ってお茶を飲んでいる。

『今日は 市に新しくできた遊園地の特集です。この遊園地は

』

「なんでもジェットコースターが人気らしいな」

「遊園地かあ。ちよつと行ってみたいかも」

「じゃあ、明日一緒に行ってみるか？ちよつど月曜日だからそんなに込んでないだろうし」

「ホント！？ふふふ、遊園地なんかいつ以来だろ？」

「よし、決まりだな」

翌日

俺たちは朝、割と早く家を出た。

電車を乗り継ぎ、 駅で降りた。

そこから、バスに乗って15分ほどの遊園地前というバス停で降りた。

「よつやくついたな。いや〜長かった」

「そうだね。一時間もかかるとは思わなかったよ」

「さて、気を取り直して今日は遊ぼう」
「うん！」

俺らはチケットを購入し園内へと入っていった。

「ほー、俺たちの市にこんな大きな遊園地が作られたんだ。すげーなー。」

「ホントだよね。けど私たちが良かっただ？」

「いいだ、いいだ。姉貴は仕事で来れないしい、弟は熱出して動けないしい・・・今付き合ってる子いないし!!」

上から俺、紫苑、秀司の順だ。

「最後のが本音だろ、おい。」

「まあ、チケットくれたのは俺たちの姉貴だからあそんなことしたら後でどんな目に遭うか・・・」

「はは、秀司のお姉さん恋愛に関しては厳しいからね・・・」

(今までの秀司の付き合ってる回数したらぶち殺されるだろうな)

心の中でドンマイと思ったがすぐに自業自得か、と思い同情するのを止めた。

「けど高かったんじゃないの?このチケット?」

「なんかぁオープン記念でチケット半額だったらしいよぉ。」

(最初から冒険しすぎだろ！？潰れるぞ！？)

あ、言い忘れていたが今俺たちは遊園地に来ている。

なんでも俺たちの市に新しく出来て、たまたま秀司の姉が抽選で当たったのだ。

だが秀司姉は仕事で忙しく、秀司に譲つたらしい。
なので代わりに俺や紫苑と一緒に来ているのだ。

「お、そろそろ開くらしいから入ろうぜい。」

「楽しみ！」

と言って二人は先に行ってしまった。

(久しぶりに遊園地なんてきたな。 よーし！今日は遊び倒すぞ)

そして俺も後に続いてった。

入ってみると、思っていたより人が多かった。

「けっこう人いるなあ」

「そうだね」

月曜日とはいえ土日避けて会社の休みを取ったのだろう。家族で来ている人たちがかなり多い。

中には恋人同士できている人もいる。
俺たちもあんな感じでみられているのかなあ。

「さて、まずはどこからまわろうか？」

「うーん、じゃあジェットコースターかなあ」

「いきなり!!?」

確かにおすすめらしいけどさあ。

まあ、俺は速さには慣れていているから良いけど。

ジェットコースターの列に並ぶこと5分。

ようやく俺たちの番が回ってくる。

なんと一番前の席になってしまった。

「うわあー一番前ってやつは怖いかも・・・やめときゃよかったかな・・・」

「いやいや、それを楽しむのが絶叫マシーンだから」

全員が乗り込むとゆっくりとその機体が急なレールを上っていく。
ちよつどてっぺんに上りきると一気に急下降する。

「「「きゃああああああ」」」

咲だけではなく後ろの方からものすごい悲鳴が聞こえる。が、俺にとってはこれくらいの速さ、どうってことはない。

音速移動に比べたら足下にも及ばん。

あの術を覚えた頃はよく吐いてたっけなあ。

その後も何度か上下運動が続き、ようやく元の発車位置に戻ってくる。

降りてきた咲は若干ふらふらしていたが、俺はしっかりとした足取りで降りた。

「真二、平気そうだね・・・」

「ああ、あのくらいの速さならどうってこと無いぜ」

「そうなんだ・・・私はちよつと酔っちゃった・・・」

といて俺に寄っかかる咲

「おい、大丈夫か？」

「ごめん、ちよつと休憩させて」

俺たちはベンチに座り咲が復活するのを待った。

しばらくして、咲が復活して俺にとって最悪な一言を言いなつた。

7

「次はお化け屋敷に行こうっ」

「うっ、それは、ちよ、ちよつと勘弁を・・・」

「だめだよ。男の子がお化けを怖がっているようじゃ」

「お前、俺がそっち系が苦手って言うことを知っていて・・・」

「ほら行くよっ」

咲は俺の手を取ってずんずんと引っ張っていった。

数分後、お化け屋敷から男の悲鳴が聞こえたという・・・

チケット半額効果が効いているのか意外と客が多かった。

「うーん、まずどれに行く？」

と紫苑がパンフレットを見ながら俺と秀司に訪ねてきた。

「まあ、やっぱり目玉のジェットコースターだろう。」俺

「ここは無難にウォーターライダーだろおい。」秀司

ギロつとにらみ合う俺たち

「お前ウォーターライダーのどこが無難なんだよ！」

「そつちこそすぐに有名なのから行こうとするとか遊園地の楽しみ方がわかってねえだろ！」

「物の楽しみ方は人それぞれだろうがっ！しかもジェットコースターは早めに行かないと混でくるじゃねーか！」

「そんなのはウォーターライダーだって同じだあ！」

「やんのか！」

「そつちこそお！」

と殴り合いを始めようとする俺たち。

「ちょっと遊園地に来て喧嘩なんかしないでよっ！」

と紫苑が制止に入った。

「「だって、コイツがっ！」「」

と言ってまたにらみ合う。

「真似すんなよな！」

「そっちこそ！」

「あーもう、ジャンケンで決めればいいでしょ！」

と紫苑からのアイディア

「よし、じゃあ勝った方から先に行くってことで良いな？」

「望むところだぜい・・・」

と言い拳を後ろに持って行き溜めを作る俺たち

「最初はグー！！」

「ジャンケン！！」

「ポン！！！！」

「ううう、酷いよ、咲・・・」
「ご、ごめん、ごめん。まさかあんなに怖がるなんて思ってなかったから」

俺はお化け屋敷の中でさんざん悲鳴をあげ、終いには咲に飛びついてしまうという失態をさらしてしまったのだ。
悠樹を呼ばなくて良かった。

あいつがいたら間違いない馬鹿にされるだろうな。

「ほら、気を取り直して、次の行こ、次の」
「ああ、そうだな。いつまでもウジウジしていても仕方がないか・
」

そうして俺たちは遊園地を心から楽しんだ。

昼飯の時間になり、どこで食べようかと、園内のレストランを探している、あるレストランの裏でサングラスにマスクといういかにも怪しい格好をした奴がいた。
しかも、なにやらコソコソと何かを隠しているようだ。

「真二、どうかした？」

「いや、なんでもないよ。向こうの方にもお店あるみたいだからそっちに行ってみよう」

「え？まあ良いけど」

なんとなくいやな予感がした俺はここから少し離れたところのレストランに向かった。

「きゃー、つめたっ！」
「いやっほー！」
「・・・」

・・・上の読めばわかる通り俺はジャンケンに負けましたよっ！

俺　　グー、秀司　　パー

まさかあいこも無く一発で負けるとは思わなかったね。

もちろん着たままだが。

「あんなにすごいなんて思わなかったよ。」

「もう目玉がウォーターライダーでもいいくらいだぁ……。」

「同感だな、つーか俺たちよく無事だったよな。」

「日頃の行いが良かったんだね、きつと。」

とお疲れ気味の俺たち

「そろそろ行こうぜえ。」

「どこいく？」

「ジェットコースターに決まってんだろ！」

「その前にお昼混む前に食べちゃわない？」

「そおだねえ。」

「まあ、いつか。」

(ジェットコースターは逃げないしな……)

と言って近くのファーストフード店に向かった。

適当なレストランで俺はスパゲティ、咲はカレーライスを注文した。ミートソースがかかったそのスパゲティは味が濃すぎず薄すぎず、ちょうど良い味で結構おいしかった。

咲のカレーライスは本人曰く「もうちょっと辛い方がおいしい」らしい。

咲は辛党なのだろうか？

女の子は甘い食べ物が好きだと思っていたんだが・・・

「咲は甘い物はあんまり好きじゃないのか？」

「え？好きだよ、甘い物。特に駅前のケーキ屋さんのモンブランが美味しいの」

「へー、そうなんだ」

どうやら、甘党でもあるらしい。

・・・どっちなんだ？

レストランを出て、次はどこをまわろうかとパンフレットを見ながら考えているそのとき、

ズゴオオオオオンン！！！！！！！！

という、ものすごい爆発音が聞こえてきた。

あちこちから「キャアアアア」という悲鳴が聞こえる。

爆発音のする方を見ると、さっき俺たちが乗っていたジェットコースターが黒い煙を吐き出しながら、ものすごい炎が上がっていた。

「嘘・・・ジェットコースターが・・・」

「ど、どうなってんだよ、あれ・・・」

ジェットコースターのレールが折れ、下に落ちる。

地面にそれが触れると同時にズドオオオオンと地響きを立て、土煙があがる。

これは・・・爆発？

「咲、行ってみよう。魂霊の仕業かもしれない。最近の奴らは行動がおかしいからな」

「え？ちよっと、危ないよ！真二！！」

俺は咲の言うことも聞かずに走り出す。

「もう、仕方がないんだから・・・」

咲はしばらくして俺を追いかけてきた。

ジェットコースターのあつた場所に着くとそこは炎と怪我人で大混乱だった。

泣き叫ぶ子供

瓦礫の下敷きになっている係員

凄惨火傷の人

その他にも大勢の怪我人がその場で苦しみ、悶えていた。

「・・・酷い」

遅れてついた咲がボソツと呟く。

確かにこれは酷い。

「くっ、こんなこと、だれが・・・」

そこで俺は思い出す。ほんの一時間前、私は怪しい者です。と、名乗っているような格好をしたような奴が何かを陰に隠していたこと

を。

「もしかして、アイツが・・・？」

俺はさっきの場所へ走り出した。

俺たちは昼をファーストフード店で済まし、今ジェットコースターに向かっているところだった。

俺は凄く楽しみなので足取りが軽やかになっている。

（早く乗りてーなー）

と思っていたら紫苑がいきなり止まってぶつかりそうになった。

「うおっと、どうした紫苑？」

と紫苑の顔を見るとある一点だけをジーっと見ていた。

その視線の先には動物触れ合いランドと言う看板があった。

再び紫苑の顔を見るとすっげーキラキラした目をしていて

「あそこ行こう！」

と一人で行ってしまった。

「あ、待ってよ紫苑ちゃんっ」

と言って秀司もついて行く。

一人残された俺は

（おい！俺のジェットコースターは！？）

と心で叫んだ。

しばらくボーツと突っ立っていたが、ハツとしてすぐに二人を追いかけた。

動物触れ合いランドで紫苑は動物にめっちゃくちや人気だった。

紫苑が一匹の犬とじゃれていたら次々と犬が集まりだし今では周りに十何匹もいる。

秀司も秀司で動物とじゃれ合っていた。

俺は隅っこでそんな二人を見ていた。

（まあ、こうゆうのも悪くないか・・・）

と思っていた俺の足下に一匹の赤ちゃん犬が来た。

俺はその赤ちゃん犬を抱き上げると頭を撫でたりしていた。

動物触れ合いランドを出た後紫苑はすごい笑顔だった。

その笑顔を見るとジェットコースターを後回しにしたのがどうでも良くなった。

「じゃあ次こそジェットコースター行k

ズゴオオオオオンン!!!!!!!!!!!!!!

と大きな爆発音がした。

「な、何の音!?!」

「ジェットコースターの方からしたぞお!」

「行ってみてくる!?!」

と俺は走り出した。

「おい、まてよ!」

「置いてかないでよ!」

と秀司と紫苑が追いかけてきた。

ジェットコースターの近くまで行くとジェットコースターは酷い有様だった。

レインが爆発で落ちていて、その下に人が倒れていた。

爆発の炎で木が燃え上がり、炎でその場を真っ赤に染めていた。

「なんだよ、これ……」

「ひでえ……」

「……」

紫苑はあまりの光景に言葉を失っていた。

（俺が乗る前にこんなことしゃがって！いやそんなことより……）

「許さねえ、こんな場所で爆発なんて起こしやがって……！」

と言い俺はジェットコースターの方に走り出していた。

後編

怪しい男のいたところまで、俺は全力で走った。

「はあ、はあ、はあ、さすがにもういねえか・・・」

あのときは明らかにあそこで何かを隠していた。
俺の予想だと十中八九時限爆弾なのだが・・・。

「よし、調べてみよう」

確かここら辺になんか隠していたような・・・。

建物の周りに生い茂る植物の中を探していると、何か柔らかいものに触った。

「なんだ？」

引っ張り出してみると、それは少し大きめのぬいぐるみだった。
どうやらこの遊園地のマスケットキャラクターのぬいぐるみのようだ。

「隠してたのってこれか？」

「真二、その中に爆弾が入っているかも」
「なるほど。見てみるか」

ぬいぐるみの背中に付いているチャックをゆっくりと開ける。
たった数秒であろうその時間は異様に長く感じた。

「これは・・・!」

案の定、中から出てきたのは、秒刻みで数字が減っていく黒い塊だった。

「嘘・・・」

咲がその場から後ずさる。

まさか本当に爆弾が出てくるとはな。

しかも時限爆弾ときている。

あまりの光景に呆けていると、その数字が目に入り、ふと我に変える。

爆弾の数字は残り30秒を示していた。

「な!？」

まずい。

このままじゃ俺らもあの世逝きだ。

残り20秒。

ど、どうする!?

どこか人の居ないところへ・・・。

残り15秒

そ、そうだ。

この手があったか!!

俺は周りに人がいないことを確認し、足の神経を研ぎ澄ませる。

「音速移動！」

足の裏から風を噴射すると、同時に音速へと達する。

俺の体は超スピードで上空へと吹っ飛ぶ。

あと10秒。

物凄い勢いで空を切り、遊園地のアトラクションが米粒程度に見えるところまで上昇する。

「ここまで来れば大丈夫だろ」

その場で爆弾を上空へ思いっきり投げ、俺は急降下する。

残り3秒、2秒、1秒

「咲！！伏せろおお！！」

俺が地上に着くと同時に咲を抱え地面に伏せる。

次の瞬間、俺たちの真上で空が爆ぜた。

ズドオオオオン！！！！

顔を上げると空が真っ赤に燃えていた。

「はあ、はあ、危機一髪だったぜ」

「ほんと、私、心臓止まるかと思ったあ」

「だが、これでわかったことがある。これは間違いなく人間の仕業だ。魂霊とは関係無さそうだな」

「そうだね。・・・ちよつと適当な場所で休もうよ」
「ああ」

ジェットコースターの爆発現場まで行くとそこには多く人が苦しみに悶えていた。

とりあえず俺は瓦礫を退かし埋もれている人を助けにかかった。すると後ろでボーツと見たいた二人もハツとなり瓦礫を退かすのを手伝い始めた。

「おい！お前らも見えてないで手伝え！！」

俺は周りで見ているだけだった人たちに叫んだ。

すぐにその人達も我にかえたのか瓦礫を退かすのを手伝い始めた。そこには皆一致団結して瓦礫に埋もれたり倒れている人の救助にあたる光景が見れるようになった。

これだけの人が集まれば良いだろうと思ひ

「他にも爆弾がないか探してくるわ。」

「それは警備員や警察に任せた方が良いと思うよ。」

「いや、人手が多いに越したことはないだろう。」

「じゃあ俺っちも行くよお。」

と秀司が乗り出してきた。

「わかった。じゃあ紫苑はここでの救助を引き続きやってくれ。」

「・・・わかったわ。」

最初はついてくる気だったようだが渋々納得してくれた。

「じゃあ二手に分かれて爆弾を探してみよう。俺は北側を探すから秀司は南側を探してくれ。見つけたら連絡することにしよう。」

「OK」

「二人とも気をつけてね・・・」

と紫苑は心配そうに言ってきた。

「こんなの喧嘩してる時と変わんねーよ。」

と俺は茶化した風に答えた。

「大丈夫だってえ。じゃあ行ってくるよお。」

と秀司は言うつとすぐに姿が見えなくなるほどのスピードで走って行った。

きつと能力を使ったのだろう。

「さてと、俺も探しに行きますか。」

と言い俺も爆弾を探しに走り出した。

しばらく近くのベンチで休憩していると、さっき爆発が起きた場所に人が集まってきた。

「ここにいと面倒なことになりかねんし、移動するか」
「うん」

少し離れたところをうろろしていると咲が唐突に話しかけてきた。

「ねえ、なんであそこに爆弾があるってわかったの？」

「ああ、それは黒い帽子をかぶったサングラスにマスクの男がコソコソしているのをあそこを通った時に見かけたからだよ」

「え？そんな人いたっけ？」

「確かにいたはずだ。そういえば誰も気付いてないようだったな・・・。妙だ。あんなにいかにも怪しい人ですみたいな人なら誰か気付きそうなんだがなあ」

なんとなくそれが妙に引つ掛かってかんがえていると、俺に醜態を晒させたあのお化け屋敷が目にとまった。

ん？待てよ？

どこかで聞いたことがある。

魂霊の中には・・・。

「なるほどな。これなら説明がつくぞ」

「え？どういうこと？」

「魂霊が絡んでいる可能性があるってことだよ」

「でもさっき魂霊は関係無いって・・・」

「確かに直接手を下したのは魂霊ではないだろうが、俺が思うに今回奴等が大きく関係している」

俺があの犯人（仮定）を探しに行こうとしたとき、警察と消防車が到着した。

消防士がジェットコースターの火を消火し、警察は遊園地から出ないように指示を出している。

これなら犯人がもう遊園地の外に出ることはないだろう。

俺も俺に出来ることをする。

奴を探し出すなら、防犯カメラの映像を見て探すのが良いんだろうが、流石にそれは無理だ。

「しょうがない。片っ端から探すか」

例の男を探すべく、俺達は走り出した。

爆弾を探すために秀司達と別れてから何十分かたった。

その間に爆発がまた起きたのだが、そっちは秀司が行くとさつき連絡があつたので任せて俺は引き続き爆弾を探していた。

（さつき爆発がまた会つたっていうことはやっぱりまだ爆弾がある可能性が高いな・・・）

そう思いとりあえずまだ行っていない場所などをしらみ潰しに探し回った。

実際もう警察などが客を避難させたり、爆弾探しをしてるからあまり身動きがとれないだろうと思ひ俺は人が入らなそうな所を探し回っていた。

「くっそ、これだけ探してるのにまだ見つかんねえっ。」

俺が悪態を吐いていると携帯が震え始めた。おそらく秀司だろうと思ひ画面も見ずに電話に出る。

「そつちはどうなってる？」

『なんか空中で爆弾が爆発したみたいだから特に被害は無いみたいだよ。』

「空中で爆発？なんで？」

『さく。いきなり空が爆発したんだつてえ。』

「まだ爆弾が有るぞつてことを見せ付ける為なのか？」

『だとしたら次の爆弾が有つて爆発するつてことだよねえ。』

「ああ、そうなる前に何とかしなきゃな。」

『だねえ、じゃあ俺つちも爆弾捜索に戻るよ。』

「わかった。」

と言い電話を切った。

（後行つてないのは観覧車の方だな。）

そう思い俺は観覧車の方へ走つていった。

片っ端から捜すとはいっても結構な広さがあるこの遊園地から1人を捜すのは至難の技な訳で。

俺は犯人を見つけられずに途方に暮れていた。

「くそお。全然見つかんねえ」

遊園地の中央に位置する噴水の縁に座っていると、目の前に例の怪しい男が歩いてきた。

「!!! おい咲。あの木の前に歩いているサングラスとマスクをつ

けている男は見えるか？」

「え？・・・そんな人どこにも・・・」
「やっぱりな。よし、あとをつけるぞ」

その時、男がニヤリと笑った。

次の瞬間。

園内全体に轟音が響いた。

ズドオオオオン！！！！

またか！！！！？

音のした方を向くと、観覧車が大炎上していた。

幸い、警察の指示で観覧車に乗っている客はいないことがせめてもの救いか。

「次は観覧車かよ」

「真二、早く追いかけなきゃ」

「ああ」

ゆっくりと歩く男へ、少し急ぎ足で歩みを進め、背後から声をかける。

「おい、おっさん。ちょっと待てよ」

「・・・なんだい、君は？」

ピリピリと緊張感が漂う空気の中、俺達は向かい合った。

俺は観覧車の周りをしらみ潰しに探していた。
もう警察も居るし爆発は無いと思うが念のために探していた。

(警察に会うたびに非難しなさいって言われただけだな・・・)
そのたびに返事はしてるが帰る気は毛頭無い。

(つーかそれって俺怪しく見えねーか?)

と思うが気にしたらやる気無くす気がしたので止めておいた。
ふと爆弾を探し周っていると、一人の青年が空に手をかざしていた。

(なんだ?)

疑問に思い手をかざした方を見ると観覧車があった。

ズドオオオオン!!!!!!

そして次の瞬間には観覧車は爆発した。

(な、なんだ!?)

不信にに思いまたその青年の方を見ると青年は爆発した観覧車を見
つめていた。

全くの無感情で・・・。

「なあ、おっさん。ちょっと待てよ」

俺は男の後ろから声をかける。

「なんだい？」

男が振り返り、俺と対峙する形になる。
咲は俺の斜め後ろで警戒しながら立っている。

「お前がこの連続爆破の犯人だろ」

「・・・そんな訳がなかるう」

「とぼけてんじゃねえ!!」

俺は風を纏い、威力強化した蹴りを男の顔面に向かって繰り出す。
しかし、男はそれを左手で受け止め、右手で殴りかかってくる。
俺はそれをうまく避け、距離をとる。

「今の蹴りを素手で受け止められるってことがお前が化け物だっ
ていう証拠だ!」

「ちっ、面倒なやつだ。死ね!!!!!!」

男が何やらスイッチのようなものを取りだし、ボタンを押そうとす
る。

あれは爆弾のスイッチ!?

不味い、この近くに隠してあるのか!!

「させるかあ!!!!!!」

俺は一瞬で音速まで達し、男の手の中にあるスイッチを奪い取る。
そしてそのまま顔面を思いっきり殴りつける。

「ぐはああ!!」

男はまともに俺の拳を受け、その場にぶっ倒れる。

次の瞬間。

男の体から黒い煙のようなものが出てきた。

「出たな、本体！」

俺は即座に術式を展開し、一気に接近する。

「炎華！」

「グッ！・・・私を倒して、も、もう1人が・・・グワアアアア！
！！！！」

黒い煙は俺の炎に焼かれ、消滅してしまった。

「・・・今、もうひとりいるって・・・」

「嘘だろ！？また1から探せっていうのかよ！！」

その時、咲の背後に黒い煙がもわもわと動いていた。

「咲！そこから離れろ！！」

咲はハツとして、その場から離れる。

俺はその隙を見逃さない。

「風刃！」

風の刃が幾重にも重なり、黒い煙を切り刻む。

「グギアアアア！！！！！！」

「・・・終わった・・・か・・・」

俺はその場に座り込んだ。

俺は気がついたらその青年に話しかけていた。

「あんた今何した？」

青年は俺に気づいたのかこちらの方をゆっくりと向き

「何？とは？」

「ふざけんな！あんた今観覧車に何かしたろうがっ！！」

感情を抑えられずに俺は叫んだ。

「浅はかだな、そんな証拠無いだろうに。それに此処から観覧車に何か出来る筈無いだろ。」

「嘘つくなよ。あんた能力者だろう？」

青年は少しだけ眉を動かしたがすぐに無表情になった。

「中々良い勘を持っているな君は。」

「大人しく捕まりやがれっ！！」

俺は青年の方へ走り出した。

「敵の実力も判らないのに飛び込むとは・・・」
「グハッ!？」

俺は腹に重たい衝撃を受けて吹き飛んだ。
見ると幾つものビー玉がくつついて転がっていた。

「俺の能力は威力倍加くダブルパワー」。威力を掛け合わせる事が出来る能力だ。簡単に言えば掛け算をするって事だ。」

そこで俺はピンと来て

「さっきの爆発も!？」

「そう、爆弾を幾つを同じ場所に仕掛けて威力を倍加させた。」

青年は何の感情も込めずに言い放った。

「何でこんなことを!」

「雇われたからだ。」

(雇われたからだって?・・・そんなことで多くの人を傷つけたのか!?)

「ふざけやがってー!」

俺はまた男の方へ走る。

「浅はかだな・・・」

また青年は幾つもくつついたビー玉を投げてきた。

「同じ攻撃を二度も喰らうかつ」4

俺は体を捻りながらビー玉をよける。

「喰らいやがれー！」

俺は渾身のパンチを放った。

すると青年の顔面に当たり吹っ飛んで行った。

どちらも・・・

(なんで俺まで吹っ飛んでる！？)

そう思った瞬間にわき腹から急激な痛みが襲った。

「危なかった。君を吹き飛ばさなかったら気絶していたよ。」

「な、何をした？」

「簡単な話だ。指に威力倍加くダブルパワー>を使い威力のあがった突きをしただけさ。」

まあ、手で押し付けただけだからそこまで高い威力は出せなかったけどね、と青年は続けて言った。

「今のうちに逃げさせてもらうよ。」

と言い男は逃げようと後ろを振り向く。だが・・・

「逃がさねーよお。」

「なにっ!？」

と秀司が青年の前に立ち塞がった。

「何か観覧車の方で爆発起こるしい、鍊には連絡繋がらないから見

に來れば鍊が犯人らしき奴とバトってるのが見えるし・・・」
ピンチじゃん。と続けた。

「手伝おうかあ。」

と秀司が尋ねてきた。

「いや、これは俺の喧嘩だ。手え出すなっ」

「OK」

と言ひ秀司は青年の前に立ち塞がり逃げ道を無くす。
男はそれに苛立ったのか秀司に

「どけっ!」

と言ひビー玉の固まりを投げつけようとする。
すかさず俺はその手首を掴み

「あんたの相手は俺だろうがよっ!」

と振り向いてきた男の顔を横から殴った。

「グフツ!？」

と男は吹き飛んで壁にぶつかる。

「俺との喧嘩中に余所見するとは随分と余裕だな、オイ!」

青年はまた立ち上がり今度は俺に突っ込んでくる。

「舐めるなよ、この若造がー！」

「てめえこそその若造を舐めてんじゃねー！」

青年が繰り出した威力倍加くダブルパワーで威力の上がった突きを紙一重でかわしカウンターでこっちの拳を顔面に叩き込んだ。

「うおおおらー！」

「へブシツ!!??？」

青年はそのまま一回転しながら吹き飛ぶとそのまま気絶していった。
。。。

あれからしばらくして、爆破事件の犯人は捕まり、俺達は電車に乗っているところだ。

「で、なんで犯人がわかったの？」

「それは、犯人が憑魔に憑かれていたからだよ。」

「憑魔？」

「憑魔つてのは魂霊と人間の中間の存在だよ。だから思考力や言語能力もあるんだけど、不安定でその存在をうまく維持できないために人や動物にとり憑くんだけ。でも今言ったように存在そのものがあやふやだから俺みたいな霊力の高い人間しか視認できないんだ。」

「ふーん。だから私にはそんな怪しい人っていうのが見えなかったんだ」

「まあ、本当は少しだけ違うんだけどな。だいたいそんな感じだ」

「それにしても良かったあ。犯人が捕まって」

「ああ。だがしかし、もう1人の犯人はよく見つけられたよな。ちゃんと憑魔も追い出せてたし。」

「他の術師の人がやったんじゃない？」

「それだったら憑魔を逃がすはずがないんだがなあ」

でも、何はともあれ、一件落着だ。

俺たちのお出掛けは不運な物に終わってしまったけれど、今度行くときは楽しい思い出が作れたらいいなって、そんな風に俺は思ったんだ。

あの後すぐに青年を縛り警察が来る前に俺と秀司は逃げていった。
秀司は

「え〜これって勲章もんのお手柄じゃない？警察からなんかご褒美もらおうよお〜。」

と渋っていたが俺は警察と関わりたくないので無視して逃げ出した。
秀司も諦めたのかそのままついてきている。

（つーかまず絶対に警察に怒られるしな〜）

俺の判断は賢明だったといえよう。

俺たちはすぐに紫苑と合流して今は遊園地の外に居る。

紫苑が言うには怪我人は多かったが死者は一人もないそうだ。

まあ、不幸中の幸いというやつだ。

帰り道に

「また遊園地行きたいねえ〜。」

と秀司は言ったが、俺と紫苑は首を振り

「「しばらくは遊園地行きたくねーよ（ないよ）」「

と呆れながら返事をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1115z/>

番外編 いざ、遊園地へ

2011年12月4日02時49分発行